

激励の会

有坂 広一

喧嘩するならば、一対一でやるのが当然だろう。しかし長沼栄一は誰かを引つ張り出して複数になった。卑怯なやり方だから、杉村良助は甚だしく嫌っていた。

彼は長沼のことを共通の知り合いに話したくてウズウズしていた。そんな時、社にライターの丸田龍太郎が課長の有泉に用があつて訪ねて来た。そこは神保町にある新生社という広告会社である。丸田は先日長沼とやりあつたばかりらしい。それで彼の用事がすんでから近くの喫茶店に誘つた。二階の楕円形の大きなテーブルに飾つてある紫の花を横目で見ながら、隅の二人用に座つた。

「山本さんから話は聞いています。長沼さんは相変わらずです」杉村は苦笑した。

「困つた人だよ」丸田も笑つた。

三日前、新宿のスナックに行くとき長沼がイラストレーターの手を携帯で呼び出し、やがて三人で飲みだすと、段々といつもの癖が出てきた。そんなに酔つてゐるわけではなかつた。

「丸田君、君はいい男だけど、何だかくすんでいて、パツとしないな」

穏やかな丸田だが、黙つていながつた。相手が相手だけに感情を揺すぶられて即座にやり返した。

「そういうあんたはどうなんだ。三流ライターのオーラが漂つてゐるぜ。眩しいくらいに」

「三流とはなんだ」

長沼も気分を害し、口論になつた。山本は止めたが、簡単に引き下がる連中ではない。三人とも四十代のフリーランサーで新生社に出入りしている。山本は長沼の友人で、たいてい長沼サイドに立つが、その時は味方するようなことはしなかつた。彼の口ぶりだと、長沼に問題があると思へない。

「長沼さんは、山本さんに何か言つてよと、盛んに応援を求めたな」丸田は情けなさそうな顔つきをした。

「いつもそうなんです」

「だけど、山本さんは知らんふりしてゐた」

「さすが大人ですね」

「味方したら、みっともないからな」

「とにかく複数対少数という対立関係を作ったがる人です。私と飲む時もよくそういう構図になります。一対一の場合でも、やたら仲間褒めをして誰某は優秀だとか、異才だとか、女にもてるとか、口にします。自分の力を間接的に誇示しているわけです。私に言わせると、落ちこぼれの精神構造ですよ。つまり集団の負の部分垂れ流しにしているのです。自分で気がつかないだけで」

「分析的に見ているな」丸田はニヤリ笑った。

「丸田さんは、どう思いますか」

「あの男はポーズの人でね。ポーズが第二の天性なんだ」

「格好つけている人は嫌味ですわね」

「ポーズの人は絶望的な性格らしくてね、そんな奴は大成しないそうだし」

「虚勢を張って、自分を過大評価しているのです」

「君もかなり心証を害しているようだな」

「酔っぱらうと、よく担ぎっこに付き合われますよ」

「なんだい、それ」

「ジャンケンして、負けたほうが相手を担いで走るのです」

「馬鹿なことをするんだな」

「幼いですね。いつか、仕返しをしてやりますよ」

「深入りしないほうがいいぞ」

「お付き合いはできるだけ、断るようになっているけど」

「それがいいね」

話が終わると店を出て、神保町駅の近くで別れた。八時頃まで仕事をして電車帰る時、隣の労働者風の二人が、話をしているのが聞こえた。それはこうなのだ。大衆食堂で飯を食い終わったら、目の前に座っていた老人も食事をすませて、ほっとしていた。ひょいと湯呑茶碗を見ると、その中に入歯が入っていた。「死にかけのジジイめに、腹が立ったな」

「ぞっとしたろう」

「食べたものを吐きたくなった」

二人はすぐに立ち上がって、次の駅で降りた。杉村は気色の悪い話を聞いて嫌な気分になった。

十一月の半ばで、強い風が吹いており、足元の落葉がやたらと多いのが目につく。午後から、馴染みになった阿佐ヶ谷にやってきた。ケヤキ並木を通って、通称ケヤキ屋敷のほうに折れ、商店街の路地をどこまでも突き抜けて行った。垢抜けした小さな家々が密集し

ていて、その一角にコーポ・サンライズがあり、白い外壁がしゃれていた。ドアホンを押すと、サロンエプロンをした水沢裕子が出迎えてくれた。

「資料を届けに来ました」

「わざわざ、すみません。上がってください」

「いいですよ」

「遠慮しないで、どうぞ、どうぞ」

すぐに帰ればいいのに、杉村は訳なく応じてしまい、奥のほうから長沼の声が飛んできて、半ば強制的に招じ入れられるだろう。六畳ほどのリビングで長沼は小机に向かい、ノートパソコンのキーを叩いていた。急ぎの仕事が入ったらしい。

「少し待ってよ。仕上げちやうから」

「ゆっくりやって下さい」

「お茶を淹れるわ」

裕子が気を利用してくれる。杉村は所在なさそうに整理筆筒の上のフォトスタンドや、かたわらの花瓶に挿した白い秋明菊に視線をやった。如何にも女らしい小奇麗な部屋である。

「お菓子もどうぞ」

裕子は日本茶を差し出してから台所を片付けだす。

杉村は和菓子を食べながら、男四十七歳と女二十七歳とはどういうものだろうと考えた。世間でいう愛人関係で、二人が醸し出すのは愛でも、エロチックでもなく、不健康な雰囲気しか感じられない。どこか無理があった。将来に何の展望もないまま孤島に一時的に停泊しているだけだ。二十分ほどすると、原稿が仕上がりに、プリントアウトして改めて目を通している。それは漫画雑誌社から注文の劇画の原作らしい。

「まあまあだな」

長沼は納得している。それから杉村の持参した資料を紙袋から取り出して簡単に見て有難うと礼を言った。「一杯やろう」長沼は裕子にビールを持つてくるように指示した。

「私は人と待ち合わせをしているんで」

杉村は断ろうとした。口実ではない。ただし待ち合わせは七時だから余裕はあった。今は五時を過ぎたばかりである。

「少しくらい、いいじゃないか」長沼は勧めた。

「いや、駄目です」

「付き合っただけなさいよ」裕子も加勢した。

「友達と飲むんです」

「だったら、前祝で飲んでいけばいい」

「そうよ。杉村さんはお酒、強いでしょう」裕子も応援する。

「さあ、飲んだ、飲んだ」

「長沼さんは楽しみにしていたのよ」

杉村は約束の時間を言われ、それをバカみたいに正直に話し、結局二人の言うままになった。飲んでいるうちに杉村の結婚の話になった。彼は養子という形で結ばれた。

「君の奥さんは素敵な女性だね。裕子君といい勝負だ」長沼が兩人を褒めた。

「私なんか、叶わないわ」

裕子は謙遜した。長沼は一缶目を空にし、二缶目を開けた。裕子が適当に肴を用意して、チーズ、イカ、ポテトサラダなどテーブルに並べる。

「資産家の娘なんて、凄いいね」

長沼の言い方は嫌味に聞こえた。さっそく、いびりだしたのかも知れない。

「双方で魅かれ合ったのです」

「でも、君の崇拜する丸田君は批判的だったぞ」

「そうかなあ」

妻の実家は土地があり、二軒のアパートを経営しているが、資産家という言葉は到底該当しない。三人姉

妹の長女だから婿養子に行かざるを得なかった。陰では計算が働いていると噂をする者もいるようだ。が、金銭的に潤うことはなかった。

「丸田さんが、そんなことを言うはずはないですよ」

杉村が抗弁する。

「俺はこの耳で聞いたんだから」

「嘘っぼいなあ」

「信じないのか」

丸田と長沼が衝突して一ヶ月が過ぎ、仲直りするわけでもなく、平行線のままである。そのしこりが長沼に残っている。そうかと言って、杉村の個人的なことに口を出すことはないだろう。

「まあいいさ。ところで奴さん、雑誌の懸賞小説に投稿したらしいな」

薄々知っているようだ。漏れているなら秘密にすることはなかった。

「この間、会ったら自信満々でした」杉村はあえて強調した。

「奴にそんな才能はあるものか」

「そう敵対しないで下さい」

長沼の地が出てきた。折を見て帰るつもりだったが、途中で退散するわけにはいかなかった。

「受賞の見込みはないね。あり得ない」

「丸田さんは大器です。賞くらいは取りますよ」

「無理だ。長年書いているから、技術はあるだろう。

だけど、時代を撃つ斬新さが無い。どこか古臭いよ」

「マスコミに出られます。見ていてください」

「本当にそう思うかい」

長沼は薄笑いをして見せる。

「丸田さんの書くものは、一流のエンターテインメントの形を持っています。それがあれば、次々と量産できます。恐らく相当な力を発揮しますよ」

「いくら鼻屑にしているからと言って、そこまで買われることはないよ」

「うふふふ……黙って聞いていた裕子が口をはさんだ。

「杉村さんは、丸田さんを心から尊敬しているのね」

「そりやそうだ、パシリを買っているくらいだから」

「まあ、忠実な方なのね」

「パシリというのは無礼だよ」

「だって、そうだろう」

杉村は怒りを抑えて言った。「長沼さん、彼と対抗したらどうなの。もともと表現者になるのが目的じゃないですか。頑張ってください。貴方は今の自分に耐えられないはずだ」

「耐えられないはず、とは何だ」長沼は刺々しい目つきをした。

「そんな怖い顔をしないでよ。私は長沼さんを奮起させるために言っているんだから」

「生意気だよ」

「そうよ。長沼さんは杉村さんより先輩なのに」

「ここでは対等だよ」

「頭の良さでは、段違いよ」

裕子は強い口調で決めつけた。外では風が荒れ狂い、看板がカタカタと鳴り、路上を金属質のものが転がっていく。

「しかし、恋人に味方されるようじゃ、見苦しいな」

その途端、長沼はパンチを食らったような顔をして、ちよつと黙ってから、抑えた低い声を放った。

「水沢君、君の言い方はなっていないぞ。比較するなんて差別じゃないか。君がこんな卑しいことを言うとは思わなかったぞ。ぼくを低めたも同然だ」

「そんなつもりじゃないわ」裕子はオロオロしている。

「彼に謝れ！」急に怒鳴りだした。

「杉村さん、ごめんなさい」

裕子が鼻をグズグズさせながら泣き出した。杉村はポケットからティッシュペーパーを取り出して渡した。

裕子は思いっきりかんだ。

「おい、下品な音を立てるな」長沼の腹立ちは常軌を逸している。

「鼻くらい、好きなようにかめばいい」

杉村は黙っていられなくなった。長沼は喉が渴いたのか、今度はピッチャーの水をコップに注ぐと、一気に飲んで自分を落ち着かせようとした。気まずい沈黙が流れた。こんな惨めな長沼を見たことがない。一体どうしたというのだ。彼は言ってみれば業界の勇者なのだ。ついこの間まで独自の存在を誇り、誰もかなう者はいない。後輩の丸田や有泉にしたら見上げるような存在だった。それがいつの間にか劣勢に回り、差をつけられてしまった。彼の怒りは裕子ではなく、自身自身に向けられたものだろう。

「俺は帰る」

長沼は立ち上がると、ハンガーのジャケットを着た。

「帰らないで」裕子が裾を掴んで止めた。

「ここには二度と来ないからな」目を合わすこともなく、サングラスをかけながら出ていく。ギャンブルに負けた裏社会の男に見えた。裕子が後を追った。誰もいなくなり、杉村は大きな音を立ててげっぷをした。数分して裕子は戻ってきた。そしてお茶を淹れ直して

くれた。スマホの時刻を見ると、六時半を回ったところだ。七時までにはまだ時間はある。

「ご迷惑をかけたわね」裕子はすまなそうな顔をした。

「いや、いいよ。長沼さんは鬱屈がたまっているんだよ」

「そう思うわ。だから私、さつきは応援するつもりで言ったの。それが却って傷つけたのね」

「ぼくも言い過ぎたかもしれないね」

「いいのよ。あれくらいは」

「いつもやられているからね」

「でも、忘れましょう」

そろそろ杉村は帰る用意をしながら、さつきから考えていることがあった。それは裕子を友人の梅谷に紹介するということだ。引き合わせるくらいは差支えないから、声だけかけてみることにした。

「裕子さんもついて来ない？」

「お邪魔じゃないかしら」

「そんなことはない。お茶だけでも」

「じゃあ、少しだけ」

案内乗気だった。裕子は改めて化粧をし、厚めのブラウスに着替えた。戸外はいつの間にか風がやんでいて、静けさを取り戻していた。待ち合わせ場所に向

かいながら、梅谷と裕子はお似合いのカップルのような気がした。いや、そうであつたらいいと期待さえした。彼は奥底で長沼から引き離してやろうと考えている。裕子はこれでも魅力的な女と言っている。何よりも服装のセンスがいいから得をしている。金銭的に恵まれた家庭に育ち、のびのびした性格でもある。

「そいつは高校で日本史を教えていてね、地味だけど、味のある奴だよ」

杉村は歩きながらPRした。

「派手な方じゃないのね」

長沼と比較して言っているのだろう。ヘンに個性があるよりは健全な市民生活が送れる性分に越したことはない。

阿佐ヶ谷駅の建物の前に立っていた梅谷が手をあげて、

「やあ、しばらく。元気かい」

「うん、元気だよ」杉村は答えた。

未知の男女を紹介すると、彼らは礼儀正しく名刺を交換した。「速記ライターとはユニークな仕事ですね」と梅谷は珍しそうである。

喫茶店に入り、テーブルに座ると、二人は照れ臭そうに笑みを浮かべた。飲物のほかにサンドウィッチを

三人分頼んだ。裕子が紅茶を飲みながら話す。

「私の祖父も教師をしていましたから、お仕事には関心があります」

「立派な先生だったでしょうね」梅谷はしゃちこぼつている。

「さあ、教頭で定年退職したのでですけど、出世よりも研究に情熱を傾けていたみたいです」

「何の研究なの」杉村が聞いた。

「望遠鏡で天体を覗いているの。論文を専門雑誌に発表したりして」

「ほう、面白そうですね」梅谷は感心した。

「祖父の方は偉い人みたいだね」と杉村。

「いいえ、ただのお遊びよ」

「でも、凡人には真似できないですよ」

「いえいえ……」

それから他愛ない雑談になった。初対面同志は緊張感もほぐれて、打ち解けた調子で話し、杉村は進行役を務めた。結構友好的なムードになった。さらにいい関係になればと願った。そして裕子が長沼のことを忘れてしまえばいいともーこうして四十分が過ぎて裕子が帰ることになった。

「とっても楽しかったわ」

彼女は微笑みを浮かべた。裕子を見送ってから梅谷と『桜々』というスナックに向かった。いつか阿佐ヶ谷の飲屋で飲んでみたいと思っていた。そこは年輪を重ねた渋い作りの店で温もりがあった。この店を雑誌で見て知っていた。改めてワインで乾杯した。

「会わせてもらって、よかった」梅谷は気分よさそう
だ。

「はたから見ている、いい感じだったよ」と杉村。

「彼女と気が合いそうだ。何となく」

「気が合うと言うのはいいことだ」

「俺もそう思う」

「今度、単独で誘ってみろよ」

「ああ、そうしたいね」

近況や学生時代の友人達の話をしていたら田島という男の噂になった。彼らは文学部の史学科に籍を置いていて、田島とはゼミで一緒だった。田島は教授に嫌われていて、そのうち学生達からも疎まれるようになり、いつの間にか大学に来なくなつた。癖があつて、好意を持ってそうにない奴だった。

「田島は半年前に、えらいことをやったぜ」梅谷の話によると、バーで飲んでいてマスターと口論になり、一旦帰ってからまた戻ってきて、ナイフで刺したと言

うのだ。

「原因はなんだね」杉村が聞いた。

「女だ、マスターと争つたらしい」

「刺すとはひどいな」

「恐ろしいよな」

確かに市民社会から受け入れられない要素があり、自ら原因を作つて、はじき出されるような一面があつた。話をしながら、適当に飲んで次に浅草の吉原に行つて風俗店で遊ぶことにした。

年が明けて一ヶ月もすると、色々な動きがあつて、電話やパソコンに情報が入つて来た。丸田からは、「賞を取るかもしれない」と知らせてきた。梅谷は裕子とデートをしたと書いてきた。上司の有泉はインド文学の翻訳を始めた。新生社ではもっぱら丸田の作品の話で持ちきりだった。

珍しく都内にも雪が降つた。かなりの大雪で、あちこちに雪だるまが作つてあるのがユーモラスだった。

そのあと晴れた日が続き、雪も大方溶けたが、上石神井の杉村の家の近くの日陰には、巨人の横顔のような雪の形がいつまでも残っていた。二月の中旬のある日、会社から帰宅すると、自室の机の上に冊子の入った郵

便物が置かれていた。急いで封を切ると、文芸トポスだった。中を開きながら胸騒ぎがした。やはり丸田龍太郎が受賞したのだ。

「とうとうやったな」

杉村は感嘆の声を上げ、また羨望の念を覚えながら先輩の榮譽を喜んだ。選考経過に目を通したら、『初めて斬った』は三百六十編の中から選ばれ、選者たちからはおおむね好評で、中には大物視している作家もいた。丸田の感想は次のように書かれていた。

——四十歳を過ぎ、焦燥感に駆られながら書いてきた。そういう自分に区切りをつけることが出来てよかった。武士社会の集団の持つている不条理を描いた。今後、私の中のマグマが爆発するだろう。この沈みきった時代に壮大な爆発音を立てたら、どんなに素晴らしいだろう。私はいつもそんな夢を見ていた。遅まきながら飛ぶ時が来た——

作品を読むと、処女作らしい初々しさが伝わってきた。杉村は滅多に時代物を読まないほうだった。が丸田の小説は引き付けるものがあった、胸が躍った。読み終わってベッドに横になり、ライバルの長沼の心情を思った。この二人は何かと正反対である。丸田は無頼だが、生活は手堅く妻子を困らせるようなことはな

かった。服装は隙のないほどおしゃれなのに、精神的に無防備だから人に安心感や好意を抱かせた。遊びの金は惜しみなく使い、年少者と付き合う時はすべて自分で持った。一方の長沼はラフな格好を好み、金銭面では計算高く、自分が損をするようなことは一切しない。

将来を見据え、着々と築いてきた丸田に対して、長沼は下降志向のままにその日暮らし的に身を処してきた。年月が経つうちに差がついてしまった。早々と丸田の家に電話をすると本人は留守で、細君が出た。お祝いの言葉を伝えたら、「恐縮です」と謙虚な受け答えをした。その夜は杉村も興奮して遅くまで起きていた。翌日、会社では丸田のことで盛り上がった。有泉課長は自分の予想が当たったと得意そうである。が、どこもなく空元気だった。嫉妬しているのかも知れない。「お祝いにっこうとしたんだけど、彼は超多忙でね」有泉は笑って見せた。

「奥さんも、てんでこ舞いしているみたいですよ」と杉村。

「だろうな」

そこへ山本も顔を出し、会話に加わった。受賞の話が終わると、丸田達の喧嘩の話題になり、長沼さんは

どうしているのかと杉村が聞いたら、心理的な窮地に陥っているだろうと気にしていた。

「二人ともプライドが高いから、妥協しないよ」山本は言う。

「しかし勝負あったな」有泉は皮肉な笑いを浮かべた。「近いうちに声をかけてやらないとね。離婚の噂もあるから、何かと不安定だろう」

友人の山本は心配している。そんな話をしている時、梅谷から電話があつて、裕子さんとは熱い交際をしていると報告してきた。新たな恋が生まれたわけだ。さらに進展することを祈っていると言うと、変化があつたらまた連絡するよ、梅谷は快活に話した。

長沼との関係はどうなっているだろうと、別の関心を持った。引き離し作戦は功を奏するかもしれない。杉村は長沼にかなり意地悪な気持ちを持っていた。桜が散つて、世の中も杉村の周辺も落ち着きを取り戻した頃、パソコンを開くと、水沢裕子からメールが届いていた。婚約したこと、長沼と別れたことなどが書かれてあつた。

《長沼さんとはあれ以来、一度も姿を見せないから、私も栃木の田舎に帰ったりしました。メールでボーイフレンドと付き合っていることをそれとなく伝えたか

ら、来なくなったのかな。でも以前に“君に恋人が出来たら、心から祝福するよ”と話していたのを思い出して、本心を知りたかったの。それで、直接会ってお話ししました。その際、

「長沼さん、心から祝福してくれるでしょうね」と聞いたの。

「もちろんさ。おめでとう」いい返事をしました。「どこで知り合ったの」

「その男性は、杉村さんの友人なの」

そして「あいつか」と気に入らないみたいでした。妻と別れたことを聞かせてくれました。奥さんの初美さんが家を出る日、長沼さんは取材に出かけるところでした。

「今朝の新聞に、丸田さんの本の広告が出ていたけど、見た？」

朝ごはんの時に、尋ねられたそうです。

「いや、関心ないから」

「電車の中で読みなさい。大型新人の登場と書いてあるわ」

「マスコミはいつも大げさなことを書くもんだ」

「貴方、悔しくないの」

「丸田のことは言わないでくれ。そのうち、俺も書くから」

「それがいいわ」

「今後、俺と会うつもりはないか」

「会わないほうがいいわ」

「そうか、分かった」

「行つてらっしゃい」

こんな風に再現してくれました。奥さんは冷静というよりも冷淡な感じで見送ってくれたそうです。一人娘は一足先に家を出て、マンションで暮らしています。初美さんはこれまで通りお姉さんのお店で働くのだからです。こういう話をしてから、また最初に戻つて尋ねました。

「君は本当に結婚するのか」

「そうよ」

「杉村の奴、やりおつたな」

憎々しげに言いました。本気かどうか知らないけど。多分冗談でしょう。杉村さん、結婚式には是非出席してスピーチをしてください」

三ヶ月後、杉村は会社を辞めてフリーのルポライターになり、営業活動しながら原稿を書いている。生活

費が足りなくなることもあるが、途中から妻がスーパーのレジで働き出し、パート収入で、何とか埋め合わせすることが出来た。

年月を経るにつれて、作家になった丸田は著書を二冊出版し、有泉はインド文学の翻訳を完成させた。長沼のことを山本に聞いたら、本当かどうか長編小説を書いていると言うことだった。色々と噂話をしているうちに杉村は何気なさそうにこう言った。

「たまに会いたいですね」

「ああ、それもいいね。飲み会でもやろうか」山本が反応した。

「ぼくが根回し役をやつて、段取りをつけてもいいけど」

「長沼さんには、俺から話しておくよ」

そんなやりとりをして、長沼のために《激励の会》ということになった。

あの頃から二年半が過ぎている。

三月の下旬で気候もよく、明るくて和やかな会になりそうだった。杉村良助は青山のある会場に向かっていた。駅を降りると、春の生温い風が吹いており、高校生のデモ隊が騒いでいた。

《原発 反対！ 原発 要らない！》

若々しい声が青空に響いた。A首相もいよいよ断末魔を迎え、崩壊寸前に来ているのかもしれない。時計を見ると早く来過ぎたらしい。それで遠回りして青山北一丁目アパートにやってきた。そこには昭和の遺物ともいふべき五階建ての建物が十五棟ほど建っており、あたかも養蜂家が蜂の巣箱を置いたようにも見えた。大半は住んでいなかった。建物と歩道の間到庭があつて、花々は自然に咲きたいように咲いていた。その中の一棟の端に、昔のミゼットバンが横着けされていて、森造園と書かれてあるが、恐らく業者だろう。その家の庭だけ花木が剪定されており、梅の木の花が輝くように咲いていた。杉村はその家に今は一人で住んでいる年老いた職人を想像した。近いうちに団地には誰もいなくなつて、取り壊されることだろう。郷愁をそそられながら会場に向かつた。

そこは天風と言つて、高級な居酒屋で、かつてのメンバーが顔を合わせる事になつてゐる。名目は《長沼栄一さんを激励する会》で、発起人兼幹事は杉村である。和風の部屋にはまだ誰も来ていない。彼はあくぐらをかいて座つた。テーブルにはお手元とおしぼりが丁寧に並べられていた。

長沼はどんな様子でやってくるのだろう——さつきから好奇心を覚えながら、待ち詫びていた。トップを切つて有泉が現れ、つづいて山本、丸田、長沼、最後に紅一点、梅谷裕子が入つて来た。薄いピンクのブラウスに透けたようなギャザーのスカートが鮮やかで、ひときわ目立つた。六時になり、杉村は八畳大の部屋に勢揃いした一同を見回しながら挨拶した。

「本日は長沼さんを激励する会ですが、本当は先輩から励ましを受けようと言うのが狙いです。未熟者の私達ですが、どうかよろしく願ひします。堅苦しい挨拶は抜きにして、まずはワインで乾杯と行きましょう。では有泉さんの音頭で願ひします」

「長沼さんの前途を祝福して乾杯！」

有泉のはずんだ声と同時に六個のグラスが合わさり、軽やかな音をたてた。

「うまいなあ。さすがにシャトーマルゴ―だね」誰かがわざとらしく感に堪えない声を出すと、皆も口々にうまい、うまいと賛同した。その高価な酒はもつとも稼ぎ手の丸田の奢りである。そしてゆつくりとふか^{ひれ}か^れスूपに舌鼓を打つ。料理は牛レバーの即漬^{ひれ}けから始まり、スペアリブのローストスパイス風味、雲丹クレソン、エビのニンク炒めなどが胃袋に収まつていく。

どれも選び抜かれた食材である。肅々と飲みかつ食べ、二十分、三十分と経過していく。

「あんたらと飲むのは何年ぶりだろう」

長沼は、杉村を除いた皆を手で囲むようにして言う。

「懐かしいよねえ」

「あの頃は若かった」

「今でも若いよ、老け込むのは早過ぎる」

みんなが口々に発した。

「杉村君、あんた一人世代が違うけど、この連中は優秀だ、豪の者だ。何だろうと抜きん出た仕事をするよ。新生社は彼らの存在抜きにしては考えられないからね」

長沼がしたり顔で言う。

「そうですか」杉村が仕方なく返事をした。

「今では小説家や翻訳家として活躍している。山本至君は有名なイラストレーターになった。俺は新生社の初期の頃を思い出すな。またこの三人で仕事をしたんだよ。な、そうだろう」

「長沼さん、杉村さん一人を除け者にしたような発言はダメよ」

裕子がやんわりと諫めた。

「いや、そういう訳じゃない」長沼は笑いながら制す。

「彼は當時いなかったからさ」

「杉村君は純文学のほうで頑張っています。商業雑誌にも登場しましたよ」丸田がその雑誌の名前を口にした。

「そうか、知らなかった。あんた、そっこのほうの才能があるのかね」長沼が杉村の顔を覗き込んだ。

「杉村君の作品を読んだけど、奇抜で面白いですよ」と有泉。

「私もファンになったくらい」裕子まで味方した。

「ほう、意外だなあ」長沼は信じられないという顔つき。

「まだ成果を上げていないのは、長沼さんくらいだよ」と山本。

「長沼さん、早く傑作を書いて下さい」

「そうだよ。時間が過ぎていくばかりだから」

後輩の有泉と丸田が発破をかける。長沼は笑みを浮かべて鷹揚に頷いた。揚げ茄子の胡麻あんかけが運ばれてきた。酒は焼酎、ウイスキー、日本酒とそれぞれお好みだ。鳥レバーのムースもテーブルに並んだ。

「声援、嬉しいね。俺も後に続くつもりだ」長沼は低い声で言う。

「それには、日頃は酒を控えたほうがいいじゃないですか」杉村が言葉を添えた。

「君もそんなことを言うようになったのか」長沼が苦笑い。

「長沼さんは酒で、何度も失敗していますからね」杉村が言い返す。

「節制しないと、いいものは書けないわ」

「いつまでもエロな雑文じゃ仕様がならないからなあ」

裕子と山本が酒に酔った勢いで楽しそうである。

「そう言うな」長沼は言ってから話題をそらした。「時に裕子君、結婚生活はうまくいっているのかね」

「幸せよ。夫は真面目で、深酒や女遊びとは無縁だし」

「今の世の中に、そんな出来た男がいるのかね」

「紹介してくれた杉村さんには感謝しているわ」

「杉村君は余計なことをするんだな」長沼は渋い顔。

「長沼さんの前の奥さんも幸せそうよ」

「それは山本さんの功績です」丸田がにんまりした。

「え、君がどうかしてやったのかい」長沼が山本を見つめる。

「ほんの偶然だけど、ぼくの知っている男を紹介したら、美人だから一辺に好意を持ってね。でも、初美さんは再婚してよかったと言っているから、ご安心ください」山本が笑みを浮かべる。

「あんたら、いい人生を過ごしているんだなあ」長沼

が嫌そうに肯定した。

「順調です。言うことなしだ」

「問題は長沼さんです。我々は期待していますから」

「才能はもともとあるのだから、開花するのはすぐですよ」

「そうだよ、天才だからねえ」

一同はアルコールでご機嫌になりながら、揶揄気味の言葉をかけた。座はますます盛り上がり、そして長沼が時々暗い表情をするのを、杉村は見逃さなかった。二時間はあつという間に過ぎた。デザートは抹茶の水羊羹が出た。裕子の好物らしく大喜びしている。最後に三本締めでお開きになった。参加者は満ち足りて、「いい会だった」と口々に漏らした。

「おい、杉村君、一緒に帰ろう。いいだろう」長沼に声をかけられた。

「途中までお供します」

杉村が渋々返事をした。二人とも西武新宿線である。電車は空いていて、座席に座ると、長沼が不快そうにしている。

「君の企画が当たったな」

「お陰様で無事に終わりました」

「君もあの連中もいい気なもんだよ」

「長沼さんも、楽しかったでしょう」

「何が楽しいか。イジメも同然じゃないか」

「長沼さんにふさわしい会でしたよ」

「俺はな、内心白けていたぞ」

そう言うってから急に眠りだした。長沼の降りる下井草に着く前に肩を叩いて起こした。彼はハツとして目を覚まし、

「おい、駅前でコーヒーを飲んでいこう。あんたも降りろ」

「時間が遅いですよ」

「たまにいいじゃないか」しつこい口調だ。

杉村の住まいの上石神井は三つ先である。一度言い出したら聞かない男だから付き合うことにした。駅界隈のカフェに入った。

「原稿は毎日書いているのかね」長沼が聞く。

「毎日とはいかないけど、そういう心掛けです」杉村が答える。

「段々と書けなくなるぞ」

「そりゃ、あり得るかもしれせん」

「俺は今そうなっている」

「長編小説を書いていると聞いているけど」

「あれは早々と投げ出した。俺、はつきり言ってるよ」

マがないんだ。衝動もない」

「テーマがなくて話になりませんよ」

「あんたは特有のテーマがあるのかい」

「もちろん、あります」

「ハハハ。いつか消えて行くよ。意欲もな」

「しかし、私は若いです。大丈夫です」

「いや、そのうち後退していくだろう」

「長沼さんと一緒にしないでよ」

「いつか、君も俺と同じになる」

「そんなことないです」

「いや、同じ方向に向かってる」

長沼はいやな笑いを浮かべた。

立ち上がると「出よう」と言っただけで先に店を出た。

「駅まで送るよ」

長沼は離れがたそうについてきた。外は肌寒くなった。だだっ広い広場に通りがかかると長沼は立ち止まった。

「担ぎっこをやるよ」

挑戦的な口調である。疲れる遊びだが、酔っていた杉村は受けて立った。

「ジャンケンして、負けたほうが五メートル担いで走るんだぞ」長沼は念を押した。

「分かっていきます」杉村は向きになった。

「よし、ジャンケンポン」

杉村はパー、長沼はグーを出し、負けたほうがかっぎ上げて勢いよく走りだした。中肉中背の肩の上は居心地が悪かった。長沼はもつと大変だろう。走り終えると杉村をヨイショと地面に下した。そしてまた握りこぶしを作った。

「ジャンケンポン。勝った」杉村はガッツポーズ。「でも、無理しないで下さい」

「これしきのこと、なんでもない」

「五十肩にはしんどいでしょう」

長沼は走るといふよりもヨタヨタ歩いて、三メートルも行くと思を切らしたように苦しげである。

三度も長沼が負けた。

「長沼さん、そろそろ白旗じゃないの」杉村が気をきかした。

「いや、俺はやる」

長沼は心なしか泣きそうな声である。顔は青ざめ、表情が歪んでいる。肩に担いで五メートルほど来た所で行きなり草の上に杉村を投げ出した。杉村の顔の片方が地面に当たり、背中もしたたか打った。

「ううッ」

思わず呻き声を上げた。顔の下に植わっているジャノヒゲでひんやりした。いつとき動けずにいた杉村は息を整えると、すくっと立った。そして両手で長沼の襟首を掴んで思いつきり引つ張った。

「この野郎、何をしやる」

長沼は無様につんのめって、転びそうになった。がすぐに身体を立て直した。

「何が激励の会だ」長沼は吐き捨てるように言った。

「皆で寄ってたかって、バカにするのもいい加減しろ。企みが分かったぞ」

「意識的にやったわけじゃない」

「意識的に決まっている。オメーは俺を憎んでいるよ」

それだけ言うと、長沼はくるりと背中を向けて立ち去った。長沼の後姿を見ながら俺はあんな惨めな人間にはならないぞと、気合を入れた。

「ただ、帰る道々背中がズキズキ痛み、「クソッ、痛え！」と情けない声を立てた。」

初稿 2010年2月 「みなせ」 45号